

1969-71年、ヒロオビミドリシジミとの出会いを求めて兵庫県佐用町を継続して訪れ、周辺にキマダラモドキも産するという情報も得てはいたが一度も目にすることなく、1972年7月東京への転勤を機会にオオムラサキ目的で通った山梨の日野春でも本種には出会えないままで、関心も頭の中から消え去ったまま時は過ぎていった。

1978年に東京から高砂へと移る頃にはマイカーを駆使できる状況へと進展があり、佐用町へも二人の子供に川遊びをさせてやる目的も含めて数度は再訪問したが、ナラガシワの激減がヒロオビミドリシジミの激減と相応し、クリの花にくるチョウも多くがテングチョウで、アカシジミ、ウラナミアカシジミ、ウラジロミドリシジミをみるだけという寂しいチョウ観察地に変貌してしまったことを痛感した。

2003年6月20日、蝶友がクロヒカゲモドキに会いたいというので、1970年代にみた上月町へと案内したとき、羽化したばかりのウスイロオナガシジミを観察したことのあるコナラ林で、いきなりキマダラモドキが飛び出し、即、二人してその撮影に夢中となったのだが、実は、当時、本種がこの周辺で多く見られることは同行した蝶友から聞いていたので驚くことではなかった。しかし、本種の実物を目にするのは初めてで、特に裏面がこんなにきれいなチョウだったのかと認識を新たにした瞬間でもあり、1個体を標本化目的で捕獲したのだった。このとき、主目的のクロヒカゲモドキはまったく見られなく、生息環境が著しく変わっているのがその要因かと考えられた。



June 20, 2003 兵庫上月町

裏面

夢中で撮影した記録は、蝶友の記録に比べるとあまりに稚拙で、何とかきれいな撮影記録をとりたいと考えていた。2012年7月、姫路市近郊でオオムラサキの占有行動がみられたという情報をもとに、急峻な山道をのぼったピーク地で本種をみかけ、リベンジの機会に恵まれたが、撮影に適した挙動を見せてくれなくて満足いく結果が得られず、2013年7月7日、友人が誘ってくれたクロシジミの観察を果たしての帰り道、オオムラサキもみようと迂回してくれた佐用町のクヌギ林でようやく満足のいく撮影記録がとれた。



本種は北海道から九州まで分布するが発生地は局地的で、兵庫でもどこでも見られるというチョウではない。発生地では、飛翔がそれほど敏捷ではなく、たいがい、すぐに近くの樹肌にとまる習性があるが、まだ開翅場面にでくわしたことはない。樹液にきている個体であれば開翅を期待できるかもしれない。幼虫はカヤツリグサ科、イネ科植物を食草としているとのことで、メスを捕獲して産卵させれば飼育は簡単かもしれないが、試したことはない。